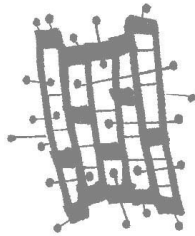


# 海外ボランティア研修を中心とした 「教育」実践について



茶谷 淳一

名古屋短期大学

タイ・ボランティア研修ツアーのはじまり

タイ・ボランティア・ツアーは今から二年前、二〇〇三年より始まりました。これを始めた最大の理由は何らかの教育的な理念や課題認識にもとづくようなものではなく、むしろ私自身が「途上国の人々のために何か実感あることをしてみたい」と強く思い始めたことでした。

貿易問題について研究をしている私は、一九九〇年代後半より立命館大学の研究プロジェクトに参加させていただ

き、アジアの途上国について関心を持ち、とりわけ新興工業地域を多く抱えているアジアにおいても貧困問題が激しいことをあらためて認識するようになりました。確かに貧困問題は従属論や世界システム論などに象徴されるように貿易問題とは決して無関係なことではありません。しかし「アジア」や「開発」という具体的実践的政策的な概念が貿易を途上国国民の生活に結びつける「環」として加わることで途上国の人々の貧困が私のなかで具体的なイメージを形作るようになりました。このことが研究としてだけでなく、何か具体的な行動をしたいと思いはじめるときと

なりました。

とはいえ語学が大の苦手な私にとって貧困撲滅の運動を組織したり国際的な行動に加わるようなことは到底不可能なこととあきらめざるを得ません。本務校の同僚に紹介された方々や、学生向けの講演会にお呼びした方々を通して知り得た、いくつかの国際支援団体の活動を支援することぐらいしかできません。しかしそれは誰かが伝えた「現実」にふれるだけであり、結局はこれまでと何ら変わりません。すなわち途上国の人々が直面する貧困を肌で感じることはできないのです。また支援の方法としてもユニセフが唱えるところの「知る」「物質的な援助をする」という間接的なものにとどまっています。「貧困の実際を自分の目で確かめたい」「(国際支援として)ユニセフが唱えるところ



ちやんに・じゅんいち ●一九六一年、

兵庫県生まれ ●主な著書・論文に『東

アジア経済と日本』(共著)ミネルヴァ

書房二〇〇四年、「雲南省の開発と国

際化』『名古屋短期大学研究紀要』第

四十三号二〇〇五年、「現代中国経済と『新国際分業論』」同

上』第四十二号二〇〇四年

ろの)最も直接的な働きかけである「現地で行動する」を何らかの形で実現したい」という気持ちがあります。募りました。

では「貧困の実際を確かめる」ことができ、そして実行可能な「現地で行動する」方法とは何かを考えたところ、「可能な限り多くの学生がアジアの貧困と直接ふれあう機会をつくる」という活動が私にとって最も良い選択肢であることに気づきました。これが現在まで続いている「タイ・ボランティア・ツアー」を始める原動力となりました。インターネットを通して、数多くの高校生たちがこのような海外ボランティア研修旅行に出かけている様子を知ったことも、多くの協力者を得ながら実現できることを確信しました。

しかし現実に実行可能かどうかは学生たちがアジアや貧困といったテーマを掲げた、このようなツアーに関心を寄せてくれるかどうかにかかっています。しかしこれが実行可能であることは私が名短の現代教養学科が実施している科目「学外研修」の指導を行っている中である程度、確信していました。また「国際経済論」や「社会と経済」という講義、あるいはゼミでの演習のなかで学ぶ学生たちの表情から感じる一種の「物足りなさ」からも実行可能であ

ることを確信していました。そして二〇〇三年度のゼミ運営について話し合う面談の中で、あるゼミ生が「今しかできないことをもつとしてみたい」「もつと違ったゼミをしてみたい」といった言葉を聞いたとき、「今こそ実行するしかない!」と決意するに至ったのです。これが学生有志たちと「タイ・ボランティア・ツアー」を始めるきっかけとなりました。

このように「タイ・ボランティア・ツアー」は私の個人的な思いと、学生たちの「今の学習に飽き足らない」気持ちや「何かがしたい」という意欲が結実したものとしてみてもまりました。

### タイ・ボランティア・ツアーの特徴

この「タイ・ボランティア・ツアー」にはいくつかの特徴があります。そのうち最も特徴的なことは(1)基本的に「学校管理下の教育活動」ではない、(2)「学生の創意と個性と実行力」が基盤である、(3)「ツアーに出かけることがすべではない」という点にあります。

### 「学校管理下の教育活動」ではない

このツアーはあくまでも私も含め学生たちが個人の資格で自由意志で参加しています。一応、私の二年ゼミに所属する学生を対象に参加の呼びかけをしますが、ゼミの評価・単位認定の対象ではありません。ですから参加する学生もこれまで名短三学科(保育・英語コミュニケーション・現代教養)・桜花学園大保育学部という名古屋キャンパスにある全学科に籍を置く学生が参加しています。あくまで「行ってみたい」「交流してみたい」と思う学生だけが参加するという形式を取っています。したがって当然のことながら費用も私を含め全員が個人で負担しており、学校の負担は一切ありません。

私自身の経済的な負担は決して小さくありませんが、校費負担とならないこのような形式に、なぜこだわるのかについてはいくつかの理由があります。

まず経済的負担が大きいこと。この負担が可能かどうかで学生に対する評価が左右されるのであれば、それは不公平以外の何者でもありません。学生の経済的背景は十年前に比べ実に多様であり、同じ学科に属する学生の間でも経済的格差が大きいことは統計を取らなくても日常学生たちと話をしているだけでもわかります。ツアーに参加する学

生の中にも費用をバイトで稼ぎ出している学生が毎年います。学納金以外の学費を自己負担している学生たちが多い今日の状況では、単位認定や科目にしないことが最善の方法だと考えています。

またツアーを「単位や評価の対象とした場合の学生の参加姿勢」に若干不安を抱くからです。これは私自身の学生不信から生まれてくるものかもしれませんが、単位の取得を目的とした安易な参加を避けることが必要だと考えているからです。これまで様々な学校行事の企画を担当したり学生に参加を指導してきましたが、積極的に参加する学生が多くいる一方で、「お客様」状態、あるいは「単位がかかっているから来た」とでも言いたげな消極的な姿勢で臨む学生を何度となく目の当たりにしてきました。この経験がツアーの「単位化」を躊躇する一つの理由となっています。

このツアーではスラム地区の幼稚園や高齢者の「デイケア」の現場、障害児施設、障害者工場、孤児施設などを訪問し交流します。経済的に発展したタイといえど、そこはやはり途上国です。まだまだ社会福祉などに対する施策や予算、そして何よりも国民のコンセンサスが大変不足しています。そのような国のそれぞれの現場で非常に限られ

たスタッフの方々が日夜、仕事に従事されているなか、私たちのために、わざわざ時間をとってくださるわけですから、この時間をどのように活用しやかに積極的に交流しようとするか、私たちの姿勢が問われます。各所で二時間から三時間交流するわけですが、これまでほとんどの交流先から「こんな積極的に交流しようとするグループは初めてだ」という声を毎回いただくことができていたのも、問題意識が高く、積極的な交流姿勢をもつ学生だけが参加しているからだと思います。これを維持するためには「単位化」や「学校行事化」せずに現在のような位置づけが良いのではないかと考えています。

理由の三つ目は私と学生たちの間はできるだけ「フラットな関係」でありたいと考えているからです。費用負担を私も学生も私費で負担することによってこのツアーに対する「距離」が等しくなり、またツアー中も私も一人の仲間として参加することができます。逆に「単位化」したり、私がかぶるツアーの費用を賄ったりすると、たちまち私は教員になってしまい学生は指導の対象になってしまう。そのため学生の創造性や自主自律性がそなわれてしまうのではないかと思うのです。ただ年長者として、あるいはグループのリーダーとして活動の方向付けや枠付けを行っ

## タイツアー2004行動表

### 23日 午前 出発

- ◇名古屋空港国際線2 F 団体待ち合わせロビー8:30集合
- ◇10:30発TG645便
- ◇14:30着Bangkok・ドンムアン空港着  
※荷物検査・段ボールの開封を求められる。  
※エカバックさんのお出迎え

- いっしょに踊ろう、遊ぼう
- ♪サンサンたいそう♪世界中の子どもたちが♪
- ※カセットテープ、テープレコーダを準備
- ◇子どもたちを「ちょっと」介助、&作業する子どもたちの見学・交流

### 午後 THAI WHEEL

- ◇車いす工場・印刷工場の見学・説明
- ◇手こぎ三輪車に乗車体験

### 24日 カンチャナブリ

- 午前 戦跡巡り・平和学習(クワイ川、戦争記念館)
- 午後 子どもの村学園
- ◇見学・説明
- ◇子どもたちとの交流  
いっしょに踊ろう、遊ぼう♪世界中の子どもたちが♪
- ※カセットテープ、テープレコーダを準備

### 27日 バンコク

- 午前 市内観光
- ◇ワット・アルン、王宮、エメラルド寺院の見学。  
※渡し船と「ニシキヘビ」
- 午後 市内観光
- ◇街を歩く  
※地下鉄乗車(MRT):Hua Lamphong→Sukhumvit
- ※モノレール乗車(BTS):Asok→Siam
- ◇Siam ISETAN見学
- ◇水上シャトルバスでメナム川からバンコクを眺める  
※リバーサイドモール→ホテルリバーサイド・メナム

### 25日 バンコク

- 午前 タマサート大学(メインキャンパス)  
今もつづくメール交流!
- ◇学生どうしの交流  
♪タイダンス♪炭坑節♪  
浴衣の着付け
- ◇学生食堂で一緒に昼食
- 午後 クロントイ・スラム
- ◇スラムを歩く
- ◇財団とスラム自治活動の説明
- ◇お昼寝後の園児たちの様子を見学、少し交流
- ◇スタッフと交流
- ◇高齢者事業・高齢者との交流  
踊りとお手玉をご一緒に。手話の振り付けで歌の披露。  
♪炭坑節♪  
※カセットテープ、テープレコーダを準備。  
※ピアノにあわせて  
♪切手のない贈り物♪
- ◇シーカ財団の薬辰也さんと交流、記念写真

### 28日 朝 バンコク・アユタヤ

- ◇3月の大火災後の見学(スアンブル・スラム)  
※焼け跡に遊ぶ子どもたち、再建に取り組む小学校の先生
- 終日 アユタヤ  
市内観光
- ◇日本人町跡、夏の王宮、アユタヤ仏教遺跡の見学
- ◇象に乗る。
- ◇ホテルに戻り、帰国準備。
- ◇Siam ISETANでの買い物
- ◇帰国便を1時間遅く間違えたことに気づき、あわててBangkok・ドンムアン空港へ急ぐ!!

### 26日 ノンタブリ

- 午前 パークレット知的障害男児院
- ◇見学・説明
- ◇子どもたちとの交流

### 29日 早朝 帰国

- ◇12:30発TG644便
- ◇名古屋空港8:30着

たり、安全の注意を喚起したりすることはやりますが、学生に交流内容や活動を強制するような立場、あるいは学生からそれを期待されるような立場になることは避けたいと考えているからです。

さらに私のパッションが下がったとき、この取り組みを終了したいと考えているからです。学校行事として行われる海外研修は当然、継続性が求められます。というよりは制度として存続させることに力点がおかれてしまうように思います。「学生への学習機会の保障」などという名目から継続をすることになるのですが、その場合、必ず「誰が付いていくか」が問題になるようです。押しつけあった結果「興味もなく、ただ業務として教職員の誰か」が「やる気満々の学生」についていくような光景は貧乏くじを引いた教職員にとって不幸であるだけでなく、引率された学生、受け入れ先にとっては迷惑であり、さらに研修自体が発展性を失うように思います。このような事態を避けるためにも現在のようない位置づけであることが都合がよいのです。

四つ目には「臨機応変に動きやすい」ということがあります。例えば、このツアーの実現にあたってはJICA(国際協力事業団)や、日本国内外の各種NPOや個人にご協

力をいただいています。その際、学校行事であれば学内の規則に縛られてしまうために、協力をいただくことが難しくなったりします(例えば、タイ語講座の講師としてお招きしているK先生はO商業高校の先生ですが、いつも「梨六個」で気軽に引き受けていただいています。もし正課であれば、様々な手続きが必要となるほか、報酬をどうするかが問題となり、結局はお招きできなくなるような事態にも陥りかねないと思います)。ツアーそのものに対する無用な障害を避けることもできます。海外の、しかもタイとはいえ途上国へ学生と出かけることに慎重な意見が、学内あるいは理事者のなかには常にあるようです。教育とは未熟な学生が未知の世界にチャレンジする取り組みであると思いますので、いかなる取り組みであろうと「リスク」が存在すると思うのですが、特に途上国へ出かけることには「リスク」や責任といった言葉が常に「まず先にありき」といった感じですか。つまり「やらない」ことから発想しているように思えるのです。これを避けるためには極力、学校のリスク負担を軽減し、参加者各個人がその分のリスクを多く負担する形をとることが必要なのです。

以上のような理由から「学校管理下の教育活動」ではない位置づけでツアーを行っています。ただこのことが一方

でこのツアーの問題点でもあるのですが、この点は後ほど述べたいと思います。

**学生の創意と個性と実行力が基盤である**

このツアーの第二の特徴は学生の個性と創意を活かし交流プログラムを企画し、必要な準備を行い実行することにあります。本学も含め、学校が企画して行われる研修旅行の多くは学校側が目的や期間、訪問先などを決めるだけでなく、「何をするか」という点もあらかじめ決めていきます。しかしこのようにすべて学校がお膳立てをしましては学生はあたかもベルトコンベアーに乗せられているかのように、学校が決めたメニューをこなすだけになってしまうように思うのです。確かに学校行事である限り、何らかの目的があり、その目的を達成するために学校側が「責任ある」プログラムを設定することは当然のことであり、学生がメニューに沿って学ぶことは何ら不思議なことではありません。確かにメニューに沿って学べば一定の基準に達する知識が得られるでしょう。しかしその反面、何か大切なものを学べずに終わってしまうような気がするのです。

実はこのツアーを立ち上げる時点では私がプログラムをあらかじめ決めて、と考えていました。しかし集まった学



生の間から「いろんなことをしたい」「本当に肌と肌が触れあうような交流がしたい」という声が上ががり、その声に押されるようにプログラムを学生たちで決めるというスタイルに変わってしまったのでした。最初の年、「どうすれば限られた時間でもっと深く交流できるか」、学生たちが自分たちで考え自分たちで実行した成果は非常に大きいものでした。わずか三時間の交流だったにもかかわらず、別れを惜しんでバスに乗る学生たちも施設の子どもたちもスタッフの皆さんもお互いに大粒の涙を流し合うという成果です。言葉も通じないもの同士が短時間でこれほど深くお互いを思い合えるとは。達成感だけでなく、非常に大切なものを学生たちは学びました。

また学校が事前にプログラムする方法では参加する学生の個性が活かされないように思います。本学の特徴でもあります。保育学部を入れて四学科の学生がいつも一緒に学生生活を送っています。たった四学科ですが、それだけでも各学科の学生の個性は異なります。また特技も違います。保育学部、保育科の学生はとにかく踊りや歌、楽器の操作などが得意です。教え方も上手です。英語コミュニケーションの学生はやはり外国人に対するものおじしな態度でしょうか。現代教養学科の学生は発想のユニークさと、ど

んな作業にでも黙々と取り組み続ける姿勢でしょうか。また当然個人のレベルでも違います。この学生たちのもつ一人一人の個性が発揮できるようなプログラムを自分たちで話し合いのなかから創造し、全員で意思を統一し準備・練習を重ねて実行することができれば、学生たちにとつてツアーはまさに自分のものとなるように思うのです。また出発までのスケジュールも自分で管理し、合同の準備作業に加われない場合、当人が補償手段として何をどうすればいいかを自ら考え実行する。これも大切な「学び」であると思います。ですからこのツアーは学生を「お客さん」にしません。だからツアー中、毎日全力投球ですから、帰国するとみんなへとへとです。でもわずか一週間ですが非常に大きな充実感を学生たちはそれぞれ持ち帰るようです。

では私は何をしているのか？ ツアーの準備段階では私は関係機関との交渉役と学生たちのアドバイザーです。ツアー中は引き続き交渉役と、もっぱらカメラマンに徹します。時にはCDプレイヤーのスイッチを押す係も。ですから私の役割は学生を主役にするためのマネージャーのようなものだと思います。





ツアーに出かけることが  
すべてではない

この取り組みの三つ目の特徴  
は「ツアーに参加することが  
すべてではない」ということ

です。このツアーは約一年間にわたる「海外の恵まれない子どもたちを支援しよう」というボランティア活動のなかのひとつのプロセスに過ぎません。この支援活動を通して海外の子どもたちやお年寄り、支援活動に取り組む若者たち(特に日本人ボランティア)と交流しようというのがツアーのねらいです。したがってツアーに参加しただけで終わってしまったのでは本来の目的を实践したことはありません。

この参加者はツアーに出発する前に交流行事に関する話し合いや準備作業を週一回のペースで集まって行うだけでなく、タイの各施設へ提供するための募金や支援物資集めを学内で、夏休み前の一〜二週間にわたって実行します。ポスターの作成、募金箱・支援物資箱の設置、学生会館前での呼びかけなどを行います。夏休みにはいると集まった募金や支援物資を整理し各施設ごとに分け梱包し、空港での手荷物検査に備えて作成した「Relief Goods」のラベルを貼って手荷物に仕上げます。

また帰国後は私たちの支援活動に協力してくださった

方々へのお札を兼ねて、「大学祭での報告展示会」と「報告書の作成」を実行しています。

ツアー期間中、メンバーは各自メモとボールペンを持ち、インタビュアーで立ち話で聞き取ったことや交流した時の感想などを時間経過を加えながらメモを取ることが求められます。特に行動記録を正確に行うため書記係を日程ごとに分担します。書記係は常時計で時間を確認しながら、行動や昼食時の料理のメニューまでできる限り記述します。

この記録と行動中に撮影した写真などをもとに、まず「大学祭での報告展示会」のための展示物の作成を行います。大学祭では特別に展示スペース(中教室規模)を借り、「行動記録」「訪問先施設」の紹介を行ったり、「タイ・トリビア」(「トリビアの泉」というテレビ番組を真似た「タイ・ものしり講座」)を行い、同時に交流の様子を写した写真やビデオなどを流し、テーブルの上に各施設からいただいた記念品や作業所の製品、スーパードで購入したお菓子類などを並べ、来場者に目と舌で味わっていただくようなコーナーを作ったりしています。それぞれメンバーたちはゼミやサークルなどの活動の合間に集まって準備し前日深夜まで展示の準備を行います。大学祭期間中は模擬店など各自ゼミ、サークルでの仕事があるため、来場者の様子を見

ることがほとんどできませんが、大学祭終了後、展示会場内において「自由帳」にかかれた来場者の感想をメンバー全員で読んで「報告展示会」の成果を確認し合っています。

「報告展示会」が終わると、「報告集」の作成に取りかかります。報告書は「Datary(行動記録)」「Report(施設紹介や課題別報告)」「Memories(感想)」で構成され、卒業式までに仕上がるよう、全員で内容を分担し(「Memories」は全員)執筆します。一月中には原稿を印刷業者に回す必要があるため、多くの学生が卒業研究の執筆と重なるというハードなスケジュールですが、メンバーはみんな遅くとも冬休み明けには原稿を私に提出します<sup>2)</sup>。参加した学生はここまですり遂げて初めて「ツアーを中心とする国際支援ボランティア」の活動が一応終了することになります。

以上のように学生にとって非常に長い取り組みなのです。本来の学習活動やサークル活動と並行しながらやり遂げるわけですから、学生の実行力にはいつも頭が下がる思いです。

またこれらのプロセスの中で学生たちは、ツアーで学ぶことと同じくらい多くのことを学んでいます。募金活動に使うポスターの呼びかけ文をめぐってメンバー同士、意見を戦わす。募金を訴えるために恥ずかしさをこらえて学生

会館の前に立ち声を出す。集まった浄財の多さに感動する一方、支拂物資に混じった心ないモノに怒りを覚える。自然豊かなタイの森の中で暮らしている子どもたちにボールペンやマジックなどを送っていいものかどうかで議論する、などなど。学生たちは準備作業を通して実にたくさんのことを学んでいます。

また行動や意見をレポートにまとめるという技術的なもの以外にも、時には特に関心を持った事柄をさらに研究テーマとして選び卒業研究にまとめる学生もいるのです。このように体験や感想をまとめる作業の中でさらに新たな学びのきっかけを発見する場合もあります。

## 問題点

これまで述べたようにこのツアーは現在のところ、あるグループによる活動の一環として取り組まれている私的な性格のものという形式をとっています。そのグループがたまたま学校という場で出会った教員と学生という身分の人たちである、ということになっています。しかし、だからといって本当に私的な活動であり、学校は一切無関係であるか、あるいはインタナショナルシッパや

海外研修など、大学教育の場が教室を出てキャンパスの垣根を飛び越え学外へと広がっていく現実が旧来からの「学校側が負う責任対象の範囲」との間のズレをも象徴している問題であると思います。

まず「学校管理下の教育活動」とは何かという問題ですが、これを定義することはなかなか難しいように思います。

「学校管理下の教育活動」といった場合、まず考えられる第一の要件は「単位認定がなされるか否か」ということでしょう。これは各大学・学科のカリキュラム構成や教育上の必要から取り組まれる教育活動として認定されたものであり「教育的要件」ということができるでしょう。もう一つの要件は発生が予想されるリスクへの対応許容範囲とということになるでしょう。これは学校における教育活動を包括的に保障する学校保険やボランティア保険など各大学が加入する保険などでリスク・ヘッジしようとする範囲に該当する活動であり、「リスク的要件」と呼ぶことができると思います。

誤解を恐れずに言うと旧来からの大学教育は教室の中で教員と学生が知識のやりとりをするような形態の「講壇教育」が中心であったと思います。「実習」は文字通り「講壇教育」で学んだことを学外で習うことであり、「講壇教

育」の補完、あるいは周辺部分として短期間行われることで成り立っていたと思います。しかも学外で行われる活動は学校によって事前にプログラム可能で、なおかつ資格免許などの取得・認定要件として「お上」から「制度的に実施が義務づけ」られていたものがほとんどであり、学校側が好むと好まざるとにかかわらず、取り組むことを強制されたものであると思います。「教育的要件」だけでなく、事故などのリスク対応の面でも従来の教育の枠内であると認識されることにより従来の「リスク的要件」の範囲に収められ、結果として「学校管理下の教育活動」とされてきたように思います。

このように「講壇教育」時代における「学校管理下の教育活動」とは「教育的要件」を満たす範囲と「リスク的要件」を満たす範囲がまさに一致していたため、何ら問題はなかったのです。

しかし現代の大学教育は両方の要件の許容する範囲が一致しなくなりました。

まずサークル活動ですが「教育的要件」としては成立していなくても多くの学生が参加していること、リスクへの対応が可能であることなどから「教育的要件」を満たさなくとも「学校管理下の教育活動」として認定されています。

す<sup>(3)</sup>。

次に学外で取り組まれる教育的活動として近年一般的となったインターンシップですが、これは「お上」が推進したこともあり全国的に一気に各大学が取り組み、「教育的要件」が与えられました。またリスク対応についても「実習」と同じような諸教育的指導を取るなどによって「実習」と同じような扱いを与えているように思います。これも現在では「学校管理下の教育活動」となっています。

これらサークル活動やインターンシップは現代の大学教育にとつて欠くことができない教育活動であり、現代の大学教育が従来の「講壇教育」にとどまることができない状況にあることを示す好例だと言えます。しかしこれらの活動が「学校管理下の教育活動」として認定されるのは「想定されるリスクが小さい」あるいは「『講壇教育』の場でも当然起こりうるリスクと余り変わらない」からではないかとも思うのです。サークル活動にしてもインターンシップにしても起こりうるリスクは、体育の授業で起こる事故や通学途上の事故などと同じようなものであり、それ以上の大きなリスクが発生することは余り想定されないと考えます(何せ両方とも基本的には大学や学生の自宅がある地域内で取り組まれる活動なのですから)。だからこそ

「学校管理下の教育活動」として認知されてきたように思  
います。

ではこれ以上のリスクを想定されるような活動を、大学  
が現在、容易に「学校管理下の教育活動」として認めてい  
るでしょうか？ 確かに山岳部などは体育の授業を遙かに  
凌駕するリスクを発生させる可能性があります。これは  
日本において登山が大学を基盤としてスポーツとして発展  
してきたという歴史的な経緯を考慮しなければなりません  
し、同時に多くの場合山岳事故の発生にともなう経済的リ  
スクには山岳部員自らが加入する保険によって対応してい  
るのが現実ではないかと思うのです。サーフィンやスキュ  
ーバダイビングなどが、これほど若者たちに普及している  
にもかかわらず、体育会系サークルとして余り見られず、  
せいぜい同好会的なものにとどまっているのは学生が体育  
会を敬遠するというだけでなく、「従来のレベルにリスク  
を抑えたい」「新しいリスク発生要因を回避したい」とい  
う思いがもたなくなって、これらのスポーツをサークル活動  
としてきちんと取り組みたいと願う学生たちに対し大学側  
が抑制的な態度をとってしまったことも一因ではない  
かと思うのです<sup>(4)</sup>。

あらためて課題を設定し直すと、新しい学習ニーズに対

応するかもしれない創造的な教育的取り組みを教員が行お  
うとした時、従来の大学教育が想定するリスクを超えるよ  
うなリスクの発生が危惧される場合、学校はこれを「学校  
管理下の教育活動」として認めようとするでしょうか？  
私はいかに教育的意義があるうとその判断を回避して学校  
側は「学校管理下の教育活動」として認めることに極めて  
慎重な態度を取るだろうと思うのです。

なかでも遠隔地へ出かける活動には極めて慎重です。飛  
行機、自動車などの利用にはとりわけ敏感です。これでは  
あたかも「リスクの大きさ」がそれぞれの教育活動を「学  
校管理下の教育活動」とみなすか、あるいは「個人的な活  
動」であるかを見なすかを判断する基準になっているかのよ  
うに思えるほどです。

さて学生の学習ニーズの多様化は私たち大学教職員の想  
像を遙かに超えて進んでいます。その証拠に学校主催の海  
外語学研修への参加者が減っているという話を聞いたこと  
があります。理由として家計における負担の増大を嫌って  
いるためとも考えることもできます。しかしそれだけでは  
ありません。学校主催の海外語学研修に参加しない学生が  
個人旅行として海外へ語学研修に出かけるケースが増えて  
います。学生に聞くと場所が選べ、語学以外のワークをオ

プシヨンとして選べる方がいいと言うのです。これは学生たちがリスクよりも、自分が必要としているモノや学び方などにこだわりを持ち始めている現れだと思ふのです。このような多様化した学生の学習ニーズに応える教育活動は均一の一斉授業型では対応できなくなっていると思ふのです。

大学における教育創造として今、最も望まれることは、どんな学生でもついてくるといった唯一無比、完全無欠な成功モデルをみつけないことではなく、多くの先生方がひとりひとりの個性むき出しに企画したいろんな教育的取り組みを学生たちに提示するというではないかと思ふのです。その分野で今、是非「学んでほしいこと」教えたいこと」を知っているのは先生方です。また毎日学生たちと接して、「どのような学び方を求めているか」を知っているのも先生方です。したがっていろんなメニューを学生に提示し学生が選択できるような学習環境をつくるのが今の大学に求められていることだと思ふのです。本来ならば先生方が個性を活かしているんな学習メニューをつくるためにチャレンジしやすい環境を各大学は整えるべきだと思ふのです。

しかし現実にはむしろ「リスク回避」という大義名分で大

学教育に枠をはめ、一定の狭い枠の中で教育創造することを求めているように思ふのです。学生の社会性やコミュニケーション力の欠如が問われる時代にあつては、もつと学生を社会というフィールドに引きずりだし学外のような社会的組織を教育活動のパートナーとして活用しながら様々なことを学ばせる機会をつくるのが大学に求められていると思ふのですが、なかなか進んでいないのが現状ではないでしょうか。その理由はやはり大学組織の中にある「リスク回避」の姿勢にあるのではないかと思ふのです。

現在、多くの先生方が学生の多様化した学習ニーズに応えようと、取り組んでいらつしゃいます。その一つの形態が私のように、ゼミや有志といった小さな学生集団を引き連れ、学外、とりわけ海外へ出かけるという活動です。私がかつてご紹介したツアーの実行を決定させたもう一つの要因は、積極的にリスクを取って学生を海外に連れ出し「自身の世界」を体験させる活動を毎年行つていらつしゃるA大学のE先生の実践を知つたことでした。学内を説得するにあつても、この先生の実践があつたことが大いに役立ちました。でもこの先生の活動も結局、学校からは一切支援を受けず、「学校管理下外の個人的活動」として実践していらつしゃいます。この実践に対する教育的評価が高く、

その大学のある分野における「教育活動」として学生の間に定着しているにもかかわらず、です。

学生の多様化した学習ニーズに対応しようとすれば、未知のリスクがあることは当然です。ましてや「講壇教育」中心の大学教育に対し社会実践的な教育活動は当然、リスクも大きくなります。また創造的な取り組みは試行的なモノが多く、また一斉授業型ではないかもしれません。でもとにかく今の時代はいろんなことを試みる必要があると思うのです。しかしこれまで述べたように、創造的な教育を行えば行うほど、その教員に実施責任上の大きなリスクを負わなければならないという理不尽きわまりない事態が生じていることは大学創造にとつて大変不幸なことだと思ふのです。またこれを嫌って創造的な教育に取り組むことに躊躇する事態が生じることはより不幸だと思うのです。

従来の「学校管理下の教育活動」の範囲Ⅱ「大学のリスク・テイク」の範囲を大きくはみ出して、大学の現場では実際に様々な教育活動が営まれています。大学が従来の「講壇教育」「一斉授業」を想定した範囲で「学校管理下の教育活動」を規定する限り、今後よりいっそう現場の教育活動は「はみ出していくこと」になると思います。

大学創造や教育改革にあたって教員の尻をたたくのでは

なく、「リスク・テイク」のあり方を含め、積極的に教員や学生の活動をサポートする姿勢が大学側に求められていると思います。少なくともリスク回避Ⅱ活動規制ではなく、活動をサポートする立場から「リスク」を分散させるための方策や制度を整備することが大学にとつて重要な課題であると思います。さらに新しい教育創造のために積極的に社会の多様な単位を利用する姿勢と制度的保障が大学側にいっそう必要であると思います。

(注)

- (1) タイツアー二〇〇四行動表、参照
- (2) これに私が目次や扉を作成し謝辞や写真などを加えて原稿が完成します。そして卒業式の日卒業証書とともに手渡すことまでが私のこのツアーでの役割です。
- (3) いまや大学祭への参加やサークル活動を単位認定の対象としている学校もあると聞きますが、多くの学校ではまだ「教育的要件」を欠いたまま「学校管理下の教育活動」という位置づけにあると思います。
- (4) サークル活動への学生参加率の低下を嘆く前に、サークル設立を抑制していかないかどうかを再検討するほうが先決だと思ふのです。

最近、あるNPO法人の若い役員と学生生活に必要なことについて話をしていたとき、彼が「ボクは探検部に属していましたが、ひとりで活動してロシアで凍え死にそうになったり、カンボジアやタイの難民キャンプに何ヶ月も逗留するようなことを学生時代にしました。あまり学校へは行っていません。でも卒業するときに学長賞をいただきました。何でボクが?と不思議に思いました」と言いました。同感です。学長賞は彼の何に對して贈られたのでしょうか? 彼が生きて帰ってきたからこそ、学長賞が授与されたのであり、ロシアで凍死していたら学長賞は授与されなかったでしょう。場合によってはバツシングもあり得たでしょう。生死に関わらず、彼が積極的にリスクを取って行動したことには違いはありません。しかし彼が自立的に積極的にリスクを取って行動したことを賞賛したのではないのでしょうか。もし賞賛したのだとすれば学校側が彼とリスクを一緒に負わなかったことを反省しなければなりません。大学とリスク・テイクという側面から、この話をあらためて読み解くと、何か複雑な思いがしてしまいました。